

# SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

## ビジネスローン審査の現実 (その長所と限界)

少し前の話だが、ある会社が三井住友銀行の販売するビジネスセレクトローン(BSL)を申し込んでみた。結果は芳しくなかったが、元地方銀行の行員だったという受付担当者が「何故、駄目だったか」を説明してくれた。その時、手渡された2枚の用紙には申し込んだ会社が提出した2期分の決算書の分析結果が出ていた。

それは下表の通り、5つのカテゴリー、8つの財務指標で構成されていた。

カテゴリー	使用財務指標	全業種	同業種
流動性	現預金月商比(月)		
	有利子負債CF率		
安定性	自己資本比率		
	デットキャパシティレシオ		
収益性	損益分岐点比率		
成長性	売上高伸び率		
効率性	総資産回転率		
	流動資産/その他流動資産率		

各財務指標を全業種、同業種の中央値を5とし、中央値からの偏差により10段階評価をしようになっている。そして、8以上と評価された指標にはグッドマークが付けられるが、反面、3以下はバッドマークが付される。今回の申込案件は、総合点もさることながら3以下のバッドマークが4つあるので駄目だったというのが担当者の説明だった。その時点で、私はその説明に成る程と思う反面、ちょっと変だなと感じた。成る程と思ったのは、馴染みのない財務指標が使われていたことと関係があるが、ちょっと変だなと感じたのは、たった8項目80点で決めてしまうという説明が従来頭に思い描いていたものと違っていることからきていた。

その後調べてみたところ、BSLの審査モデルは、安全性16項目(比重50%)、収益性9項目(比重20%)、その他9項目(比重30%)とし、規模を評価する項目を排除しながら財務の安全性にウェイトを置くというものだった。そして、業種集中度、低ランク集中度、長期貸出集中度等の実績を算出し、特定の業種や低ランクに偏らないポートフォリオ運営を行うというものだった。だから獲得点数が良くても、当該業種が既

に満杯だったりすると取扱不可となることもある。そうした商品だった。

勿論、金利や融資条件は機動的に見直すのが基本だが、銀行が申込者に交付し明示している財務指標は公表しても差し支えない財務指標に止めていると考えるべきではないか。そんなに簡単には手口を見せないと思うべきだ。おそらく、冒頭の8つの財務指標の他に別の財務分析項目が28項目はある。それら財務分析による配点を基本に、業種やランク、あるいは定性情報などを加味して最終判断を行っているものと推測される。その意味で、8つの財務指標は「表の財務指標」であると考えるのが妥当だろう。

とはいえ、8つの中にあまり聞き慣れない財務指標があった。期末時の現預金が月商の何倍あるのかを示す「現預金月商比(月)」もその一つである。これは定期性預金を加えた手元流動性比率を示すものだと思うが、いかにも銀行が重視しそうな指標である。又、「デットキャパシティレシオ」や「流動資産/その他流動資産率」も普段はあまり使わない指標である。

デットキャパシティレシオは「有利子負債÷(現預金+有価証券+固定資産)」で算出、会社の資金調達能力(担保資産対比のみ有利子負債の水準)を示すもののようなのだが、これも銀行好みの指標と云えるかもしれない。私が「へっ」と思ったのは「流動資産/その他流動資産率」である。この比率は「流動資産の内、当座資産(現預金+売掛金・受取手形)と棚卸資産を除いた金額が流動資産全体に占める割合」を示すものだが、貸付金や仮払金等が多いとこの比率が高くなる。そうした不透明な会社は排除していこうという意思を感じる。

<無担保><第三者保証無>をキーワードに大手銀行が攻勢をかけるビジネスローン。同様の商品を作って地域金融機関も防衛に動き始めた。中小企業にとってこの種のビジネスローンは資金調達の選択の幅を広げる歓迎すべき商品ではあるが、その長所と限界をよく理解しておく必要がある。あくまで過去の財務データを定量的に評価するシステムで、将来はもちろん、現在さえも評価できないシステムなのだ。